

2025 年 1 月 21 日

東武鉄道株式会社

CO2 排出量削減

東武グループでは、環境優位性の更なる向上等による環境負荷の低減を解決すべき重要課題として提えています。特に、気候変動に大きな影響を与える温室効果ガスのうち CO2 については、2030 年度の排出量を 2022 年度比 30%削減するとともに、2050 年度においては排出量ゼロを目指します。また、環境省の脱炭素先行地域に指定された奥日光エリアにおいては、先行して 2030 年度の時点でカーボンニュートラルを目指します。

この目標を実現するため、省エネ車両・LED 照明、高効率空調設備の導入を進めるなど、省エネルギーに向けた取り組みのほか、太陽光発電等の再生可能エネルギーの導入を積極的に進め、CO2 排出量の削減に努めています。

国内初の環境配慮型・観光 MaaS「NIKKO MaaS」の開始、 鉄道輸送における実質再生可能エネルギー100%の実現、 バイオ燃料バスの運行

東武鉄道、栃木県ほか4事業者で、2021年10月から栃木県日光地域において国内初の環境配慮型・観光 MaaS「NIKKO MaaS」のサービスを展開し、公共交通の利用促進を図っています。また、東武鉄道では2022年4月から、日光・鬼怒川エリア及び都心から同エリアへ運行する特急列車など、鉄道輸送にかかる電力相当を実質再生可能エネルギー由来の電力に置き換えています。2023 年度は年間で約 3,070 万 kWh の電力を置き換えて、約 13,000t-CO₂（一般家庭約 4,100 戸分）の CO₂ 削減を図りました。

さらに今後は、栃木県内の東武グループ各施設で生じる廃食油から精製したバイオ燃料を、日光地域の路線バス等で使用する、地産地消型のエネルギーサイクル構築を目指します。

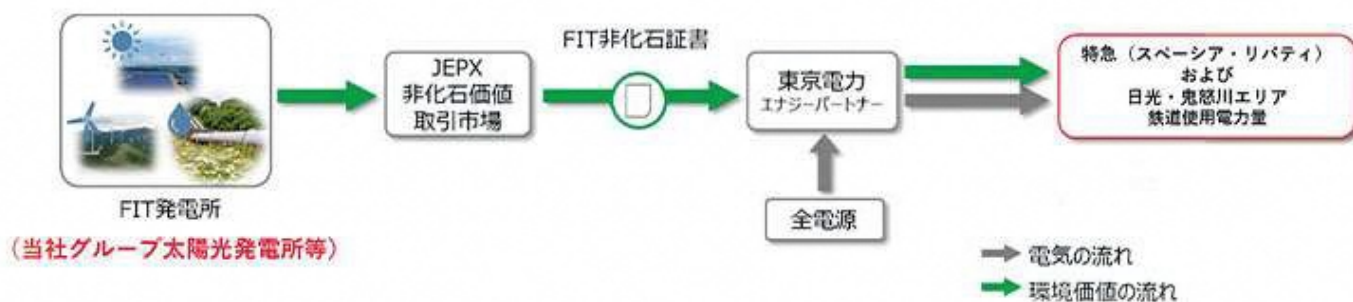
脱炭素社会への移行と周遊観光の振興による地域活性化を同時に推進することにより、「国際エコリゾート日光」としての日光地域のブランドを強化していくとともに、観光地における脱炭素の取り組みのロールモデルとなることを目指していきます。



車内で掲出されている案内ステッカー



100系車内) N100系(スペースシア X)



日光・鬼怒川エリアにおける鉄道カーボンニュートラルのスキーム

バイオコークス・バイオディーゼル燃料混合軽油「B5」

2024年1月から「SL大樹」の燃料（石炭）の一部を植物原料由来のバイオコークスに置き換える実証実験を開始し、将来的なカーボンニュートラルを目指しています。SLにバイオ燃料を使用することは国内で初めての取り組みです。

本実験では、SLのボイラーの圧力維持と保護をするため常時石炭を燃焼させる保火作業において、燃料の40%をバイオコークスに置き換え、燃焼効率やボイラーへの影響など実用性を検証しています。あわせて、DL大樹（ディーゼル機関車）の燃料（軽油）の約50%をバイオディーゼル燃料混合軽油「B5」に置き換えています。

これらにより、CO₂の排出量を年間150t（一般家庭約50世帯分の年間CO₂排出量に相当）以上削減できる見込みです。

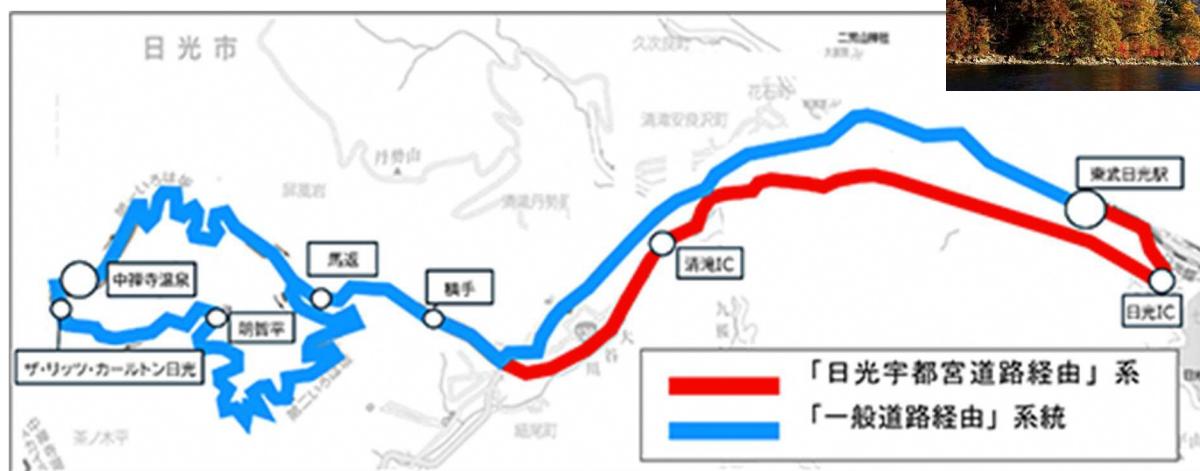
本実験の結果を踏まえ、本格運用を検討するほか、将来的には日光エリアでバイオ燃料バスを運行する東武バス日光が目指す「地産地消型のエネルギーサイクル」構築に向けた取り組みと連携しながら、バイオ燃料の使用比率を上昇させる試験を継続します。



オーバーツーリズムへの対策（紅葉シーズンの日光）

東武バス日光では、日光の紅葉シーズンにおけるオーバーツーリズム対策の一環として、一大紅葉スポットである中禅寺湖エリアと東武日光駅間を結ぶバス路線において、日光市街地の渋滞スポットを回避する日光宇都宮道路経由の急行バスを2024年10月から11月にかけて計20日間運行しました。この取り組みは、長年の課題である日光市街地の渋滞に対し、栃木県日光市が2024年3月に「日光市地域循環によるゼロカーボンシティ実現条例」を制定し、公共交通機関の積極的な利用による脱炭素を推進していることに賛同し、CO2排出削減を推進するために実施したものです。このほか東武グループでは、中禅寺湖遊覧船や明智平ロープウェイの早朝等におけるオフピーク営業、東武日光駅に早朝に到着する夜行列車や臨時特急列車の運行などのピークシフト施策も推進しました。これらの持続可能な観光地づくり・オーバーツーリズム対策に公民連携で取組むことで「国際エコリゾート日光」の観光価値の最大化を目指しています。

中禅寺湖エリアの紅葉の様子 運行ルート



https://www.tobu.co.jp/corporation/kankyo/emissions_reduction/